

令和2年度 学校評価について
～教職員自己評価・保護者評価の結果より、学校評議員のご意見等～

山形大学附属特別支援学校

1 学校評価全体として

(1) 教職員自己評価より(28名)

全35項目(1項目4点満点)の各項目の平均値は、2.6～3.1と幅があり、7項目(全体の2割)で2.8以下(概ね1/4の教員が2以下と評価)となりました。昨年度と同様の各項目の平均値は、3.0～3.5であり、今年度は低評価でした。

改善に向けての意見として、指導支援のさらなる最適化をめざすほか、保護者や医療・福祉機関とのさらなる連携を行いたいという意見が多く挙げられました。現状に満足することなく、さらなる教育の質の向上をめざしたいという表れと捉えています。

(2) 保護者評価より(全55名)

全12項目(1項目4点満点)の各項目の平均値は、小学部:3.1～3.9、中学部:2.9～3.6、高等部:2.4～3.6となっています。学部が上がるほど、各項目の平均値が低くなっています。その要因の一つとして、卒業後の社会生活に対する不安が挙げられるようです。「自分から学習や活動に取り組む【高等部:2.9】」「自分から仕事や手伝いをするように育てている【中学部:2.9】【高等部:2.4】」など、保護者として児童生徒がより主体的に活動していく必要があると認識されているようです。

本校の教育に対しての満足度(4点満点)の平均値は小学部:3.9(昨年度:3.3)、中学部:3.6(昨年度:3.4)、高等部:3.6(昨年度:3.1)とすべての学部において、昨年度より大きく数値が上昇しました。コロナ禍の中、入学式の中止、修学旅行の日程及び行先の変更など、教育活動の変更を余儀なくされましたが、保護者一人一人と連携を密に図り、個に応じた教育を概ね実施することができたものと思います。

2 各評価項目について

(1) 児童生徒や教員自身に関する評価(教職員・保護者共通の評価)

①「めざす子ども像」について

1の(2)とも関連いたしますが、教員・保護者とも児童生徒の主体性に係る項目の平均値が他の項目よりも低くなっています(下表参照)。

番号	項目	教員	小学部保護者	中学部保護者	高等部保護者
1	児童生徒は、自分から学習や活動に取り組むように育てていますか。	2.9	3.4	3.3	2.9
3	児童生徒は、自分から仕事やお手伝いをするように育てていますか。	2.8	3.1	2.9	2.4

また、教員のほか、保護者の評価は学部が上がるにしたがって数値が低くなっています。その要因の一つとして「産業現場等における実習(現場実習)」が挙げられます。

高等部の3年間の計5回の現場実習を通し、実習先から厳しい評価を受けるときもあり、社会との接続という観点から「自分から」という資質をさらに高めていく必要性があります。

来年度に向けて、意図的に自分から仕事や活動に取り組む状況を設定していくとともに、家庭においても同じような状況において児童生徒が自分から取り組む（一般化）など、さらなる主体性の育ちに寄与する指導支援を検討・実践していきます。

②「めざす教師像」について

1 (1) とも関連いたしますが、教員の児童生徒に対しての接し方や指導・支援について、教員と保護者で評価が分かれました（下表参照）。

番号	項目	教員	小学部保護者	中学部保護者	高等部保護者
4	教員は、児童生徒への言葉掛け、接し方が適切ですか。	2.6	3.8	3.4	3.4
5	教員は、児童生徒一人一人に応じた指導・支援を行いましたか。	2.9	3.8	3.4	3.6

「教員自己評価に対する意見」の記述欄において、「他クラスや学部先生方にも見守ってもらえる環境がある。」「改善に向けての前向きに取り組んでいるのが伝わる。」という肯定的な意見のほか、複数の保護者から「もっと自己評価が上でもいい。十分に頑張っている。」などと、温かい言葉も頂いています。

それに対して教員は、普段の自分たちの言動を丁寧に振り返り、人権や年齢などをふまえた児童生徒への接し方をさらに推し進めていく必要性を感じております。この点については、保護者から一人一人に合った声掛けや対応を願う趣旨の意見や教員の言葉使用に対する意見も見直す必要があります。

来年度に向けて、児童生徒の実態や将来の社会生活につながるような接し方や指導・支援となるように、改善していきます。

進路に関する情報提供に関する項目においては、中学部の保護者から対応が不十分という意見があります（下表参照）。

番号	項目	学部	4大変良い	3よい	2不十分	1かなり不十分	評価平均
9	教員は、卒業後の生活に向けての学習、情報提供を十分に行いましたか。	小	10 (59%)	7 (41%)	0 (0%)	0 (0%)	3.6
		中	7 (41%)	7 (41%)	3 (18%)	0 (0%)	3.2
		高	8 (38%)	13 (62%)	0 (0%)	0 (0%)	3.4

高等部の場合、現場実習を実施し、保護者に実習先の見学や反省会等に参加をお願いしています。進路指導において、保護者も主体的にかかわっていることもあり、高評価につながっているものと思われます。一方、中学部で実施している施設見学は生徒のみの参加で、保護者が主体的にかかわる場面はありませんでした。来年度は、保護者へ施設見学の情報等がより伝わるように、学習のまとめ方や参考資料などを工夫していきます。併せて、日々の授業が卒業後の生活につながる学習の基礎・基本になっていたり、キャリア教育の視点も含んでいたりすることの発信を心がけていきます。

③「めざす学校像」について

小学部を筆頭に、全学部とも一定の評価を得ています。「学校が楽しいと感じている。」という意見から、家庭においても児童生徒が毎日の学校生活を楽しみにしている様子が感じられます。ただ、全校に目を向けると、時折、登校をしぶる児童生徒の姿も見受けられ、家庭との連携を密にし、児童生徒や保護者に寄り添いながらも心的要因を探り、支援にいかしていきたいと思います。

④「教員自己評価に対する意見」「よりよい学校とするための改善策や意見」について（保護者：記述式）

保護者から、「授業参観日の拡充」のほか「学校を卒業した後の不安な気持ち」や「保護者と教員との情報交換や相談の機会の拡充」などの意見が多く挙げられました。コロナ禍の状況も丁寧に分析し、安全性を担保しながら各意見への対応を講じていきたいと思っています。

（２）経営の重点（教員のみの評価）

経営の重点においては、下の４項目が特に不十分であると感じています。

番号	項目	4大変良い	3よい	2不十分	1かなり不十分	評価平均
2 (1)	個別の指導計画等の活用と確実な引継ぎによる一人一人の実態に応じた適切な指導ができましたか。	1 (4%)	16 (57%)	11 (39%)	0 (0%)	2.6
2 (2)	もてる力を引き出し、社会的自立を目指したキャリア教育の推進ができましたか。	1 (4%)	19 (68%)	8 (29%)	0 (0%)	2.8
3 (3)	OJTの推進と大学教員との積極的な連携を図ることができましたか。	1 (4%)	15 (54%)	12 (43%)	0 (0%)	2.6
5 (2)	業務改善（意識改革と業務量削減）の推進と担任・分掌部業務のさらなる見直しを行うことができましたか。	1 (4%)	15 (54%)	12 (43%)	0 (0%)	2.6

不十分と感じた４項目について、令和３年度は以下のような改善案を考えています。

２（１）「個別の指導計画等の活用～」については、学校研究で取り組んでいるＣＡミーティング（評価→改善）を効果的に活用していくほか、教員間で他学部の授業を参観し、上位学部と引継ぎを行うなど、引継ぎの仕方の工夫を図っていきます。また、教科等の学びの履歴がまとめられるように、年間単元題材一覧の活用の仕方も工夫していきます。

２（２）「もてる力を引き出し、～」については、キャリア教育について全職員で共通理解を図り、小学部から高等部まで切れ目ないキャリア教育を目指します。また、子どもの実態の捉えについて、保護者の意見を丁寧に聴きながら、すり合わせていくようにしていきます。

３（３）「OJTの推進と～」については、教職経験が短い職員も多いことから、本校により合ったOJTを検討・改善し、実践していきます。また、特別支援教育をはじ

め、SDGsやICTの活用、教科教育など、山形大学附属学校として大学教員とも関わる機会を増やし、研修できるようにしていきます。

5(2)「業務改善の推進と～」については、お互いに声を掛け合うなどの同僚性を大切にしながら、文書作成、会計処理等、事務作業のさらなる簡略化等、業務の時間の配当を検討していきます。現在、今後の附属学校のあり方において大学との連携が強く示されている中、新たな業務も生じています。そのうえで、今の業務分担で対応可能か、再検討の時期に来ているようです。

(3) 基本姿勢とマネジメント（教員のみの評価）

コロナ禍の中、感染症対策等から昨年度まで実施していた教育活動が現状では実施困難な活動が数多くあることが分かりました。コロナ禍の中でも可能な教育活動を検討していくことで、「慣例に捉われない」「創造的な取組」など、教育への変革が芽生えた1年でした（下表参照）。

番号	項目	4大変良い	3よい	2不十分	1かなり不十分	評価平均
1	慣例的なことやこれまでのやり方にとらわれず、常に創造的な取組を行うように心がけている。	1 (4%)	22 (79%)	4 (14%)	1 (4%)	2.8

附属学校運営部から附属学校将来構想の一環で、附属4校園において、GIGAスクール構想、SDGsの推進を行っていく旨の方針が打ち出されました。本校も児童生徒の実態を踏まえながら、率先して取り組んでいます。令和2年度の取組等は、次のとおりです。

① GIGAスクール構想

1学期に高等部へiPad6台（前年度まで購入分：10台）導入したことを皮切りに、9月に小中学部用タブレット型端末を12台導入しました。タブレット型端末は3月末には合計40台になる予定です。また、児童生徒が一人でタブレット型端末をインターネットに接続できるように、GIGAスクール専用のWi-Fi環境の構築や、児童生徒同士が協働的に学習できるように、大型の電子黒板（65型）が導入されました。

授業での活用状況としては、全学部の生活単元学習で活用するほか、中学部・高等部の国語や数学など、教科別の指導で活用しています。また、全校行事の際に、密にならないように児童生徒の活動場所を分散させてきましたが、リアルタイムで情報のやり取りができるようにその会場同士をオンライン上で接続するような工夫を行ってきました。

② SDGsの取組

山形大学としてSDGsポータルサイトの開設（12月）にあたり、SDGsに対する本校としての思いをサイトに掲載いたしました。また、1月に高等部木工グループの実践も掲載いたしました。令和3年度の教育課程を編成する際に、SDGsの観点で反映できるように各資料にSDGsのアイコンを付加するようにしています。

3 学校評議員のご意見等（○：高評価 ▲：課題等 ■：感想等）

(1) 「児童生徒や教員自身に関する評価」について

- 感想になるが、教師自身がストイックに捉えているあたりは、福祉においても似ているところがある。保護者は、子供と教師の関係（日々の活動する様子）を目にする時間が少ないと思う。より、ストイックさが必要になる。
- 子供さんに対しての呼び方をはじめ、年齢に合った接し方は、権利擁護の第一歩であると思う。
- 児童生徒のしつけについては、保護者の不適切なかかわりも許されないものであると思う。支援者として、虐待が無いように、子供たちを守っていくことを大切にしていきたい。
- かかわっている子供をどのように理解していくか。最近、特に、形式的な理解で終わっているのではないか。内面まで入り込んで子供を見ているだろうか。教師の評価、子供の評価、保護者の評価はもちろん、その先生の個性を含めてどのようにして先生方を育てていくのか。目の前の教育技術も大切だが、それが、子供理解からきているのか。日本全体の問題だと感じる。

(2) 「経営の重点」について

- ▲ 年齢や階層別にして結果を見ていくことで、若い先生をサポートしていけるのではないかなと思う。
- ▲ 地域の学校として、あまり深いつながりが無いと感じる。コロナ禍で地域住民とのふれあいも減った。コロナ禍を経て、今後もつながりを持てるようにしていきたい。
- 県立と国立（附属）の違いについて、補助金も大きいと思う。環境も整っており、今後も見本となる学校であってほしい。
- この学校には将来性のある先生方がたくさんいる。若い方を生かし、育てていくことは、学校の将来像にもかかわってくる。そのような取組について、校長会等で情報発信をしていくことで、県内全体の底上げにもつながっていくのではないかな。

(3) 「基本姿勢とマネジメント」について

- 今年度先生方は、大変なことが多かったのではないかなと思う。模索してくださった部分が多く、ありがたい。地域のモデル校になっている。
- ▲ SDGsのポータルサイトについて、どこに、どのように掲載されているか分からない。地域の方にとっては分かりにくい部分がある。分かりやすい発信方法をお願いしたい。

(4) その他

- ▲ 資料について、「OJT」や「GIGAスクール構想」などの略語は難しいので、分かりやすく表記していただくとありがたい。